

■特集・十年前から十年後へ■

時間を越えるといひいふ

——過去から未来へ——

宮岡 絵美

散文のご依頼を頂いた。テーマは「10年前と10年後」
或いは「10年前から10年後へ」である。私は、原稿用紙
三枚以上の散文を書くことも、掲載を頂くことも、初め
での事である。何しろ不慣れなもので、読者方々の読ん
で面白いものになるものかは判然とせず、何とか頑張っ
て一生懸命書かせて頂くのであるが、拙い文章になるこ
とは、どうかご容赦を頂きたい。また、詩歌を書き始め
たのも、2010年からであり、それまでは、詩歌を読
んだり、書いたりする生活を送って来なかつた。詩歌と
いうぼんやりしたものよりも、テーマや言いたいことが
はつきりとする随筆や古典小説が好きで、よく読んでい
た。以前の私は、詩歌をいわば無駄なものと思なしてい

た。現在は、詩歌は人類、世界に置いて、無くてはなら
ないものであると認識している。人間の見方は、変わら
ば変わるものである。従って、詩歌の歴史等について
は、他の方に語って頂くこととし、10年前については個
人的な体験に基づいての記述、なぜ詩歌を書くに至った
のか、ある種普遍的とも思われる理由について、そして
現在、拙いながらも文章を綴っている自分から見た詩歌
の未来について、書かせて頂きたいと考えている。

遡る事10年前といえば、私は20代の大学院生で、遺伝
学や分子生物学などをかじっており、自分の生涯のメン
ターは寺田寅彦であると勝手に決めていた。寺田寅彦
は、物理学者・随筆家で、夏目漱石の弟子でもあり、
「吾輩は猫である」に出てくる水島寒月のモデルでもあ
る。私の学生であった時は、DNAの二重らせん構造の
発見でノーベル賞を受賞した、ワトソンとクリックが有
名で、私の在籍していた地方国立大学でも、学部2年生
位の時の授業で、わずか数ページの簡潔かつ明瞭な論文
を読まされ、この非常に美しい論文がノーベル賞のもと
になったのかと感動を覚えたものであった。しかし、こ
の発見は、当時ベストセラーとなったワトソンの著書

「二重らせん」にあるように、センサーショナルなゴシップにまみれたものであり、その後「二重らせん」を読んだ私は、研究者にはなりたくない、と思ったものである。因みに、私の指導教官は「二重らせん」を読んで人生が変わったと言っており、その後大学の研究教育者になったのであるから、人間というのは実に多様な考え方をするものである。

当時の私にとって、人生で一番大事な事は「本を読むこと」であり、また豊かな家庭に育った訳でもなかったので、古本屋を良く利用していた。100円程度で買えるので、安く手に入る文庫を読み漁っていたのである。岩波文庫より新潮文庫をよく読んでいたので、そんなに難しい哲学書などを読んでいた訳ではなかった。研究では新規性に価値があるが、私にはそんな博打打ちのような生活を夢見る余裕はなく、また、他人と競争することが極端に嫌いであり、何も考えずに働いてみたい（これは共働きの両親の影響もあったであろう）、働くことの哀しみを理解したいという変な理由もあって、幸い職を得て、大学院を中退し、働き始めることにした。また、学部生の卒論執筆時に持病を抱えたのも、働き始めた理由のひとつであった。30代まで身分が不安定な研究職

や、ハードな研究生生活、留学は自分には無理だと考えたのである。

新入職員として入職した際に上司から言われたのは、「30年後、何をしたいか、考えておきなさい」という言葉であった。それで、自分に出来る事は何かと考えた末に、科学教育をやろうと思ひ（中学理科・高校生物の教員免許を持っていた）、入職一年目の夏休みには、教育水準が当時世界一であったフィンランドへ自費で訪れた。湯川秀樹や朝永振一郎の著書と出会ったのもその頃である。振り返ってみれば、湯川秀樹の以下のような文章には、ポエジーが確かに息づいている。「科学の世界は開かれた世界である。既知の世界の向うに未知の世界がつづいている。既知の世界と未知の世界の境い目に、私はいつも立っていた」（湯川秀樹「本の中の世界」（岩波新書）より）。他の方がそういったことを仰っているかどうかは、今の所、読んだり聞いたたりしたことがないのであるが、私自身はそう思うのである。私は理系の方の書いた文章が好きで、それが私の書く詩歌や文章にも反映されているのではないかと考えている。元来、数学は詩歌の形式で書かれていたという歴史もあり、現在の様に文理は本来、分かれたものではないのである。

る。私の来歴と、作品の傾向は、比較的一致しているように思われる。

入職して何年かした頃、病状が悪化し、私は休職して療養生活を送ることとなった。そして、再び人生について逡巡し始めたのである。詩歌のような文章を書き始めたのは、この時期である。振り返ってみると、人間の、生き抜く為の、自己防衛本能のようなものであったと思われる。私にとって、文字が存在することは、この過酷な人生を生きる為の、十分な理由で有り得た。最初は、携帯電話のメール機能を使って、日記のような詩のような、よくわからないものを書きつけていた。携帯電話に書いていたのは、紙とペンで書くのは思考に文章が追いつかずまどろっこしいから、また、どこにでも持ち歩けるからであった。そして、自分の書いたものは詩なのか何なのか、誰かに判断してほしくて、2010年夏頃から、詩誌等への投稿を始めた。最初に反応があったのは、短歌と俳句であった。NHKのBSで短歌・俳句特集の番組があり、そこで穂村弘氏等に選を頂いたのである。また、短歌研究とNHK短歌でも選を頂くことが出来た。自分に合った詩形が何かと模索していた私に、道を示して頂いたのである。

しかし、やはり同時に、自由詩も書いてゆきたいと私は考えていた。誰に認められなくても、一生書き続けられ良いじゃないか、と考えていた。そして、復職への準備も兼ねてホームページを作り、そこで作品を公開していた。自由詩の分野において、転機が訪れたのは、2011年にユリイカの撰者が小池昌代氏に代わり、その初回の2月号で、投稿欄の冒頭詩に選んで頂いた時である。2010年夏頃から投稿はしていたが、かすりもせず、自分には短歌の道が合っているのかもしれない、と思いついていた頃であった。これが最後、とあって2010年の11月頃に投稿したものであり、選はずっかり諦めていた。ユリイカ2月号に自分の詩が掲載されているのを見つけたのは、3月も終わりの頃、短歌研究を見に訪れた地元の図書館であった。涙ぐみながら家まで自転車を駆って帰った日の事は、今でもよく覚えていて。その時の掲載詩は「夕暮」という詩であり、湯川秀樹と莊子へのオマージュでもあったのだが、小池昌代氏が、選評に「目に見えないものに行き着ける」云々と書いておられ、偶然か必然か、当時私は湯川秀樹の「目に見えないもの」を愛読していたため、すっかり驚いて、人間とはこんなに深くつながり合うものであるのか、私は何か

大きなものの架橋になり得たのではないかと、畏怖に似たものに震え、同時に人類として生まれたことの意義に感銘を受けたことを今でも思い出すことが出来る。人生とは、不思議なものである。いったい、何が起ころかわからない。小池氏には、努力して磨いてみるだけの何かがあるのじゃないの、と背中を押して頂いたようなものだと思っている。勿論私も、大勢の詩書きのなかの一人に過ぎないのだが。

その後、第一詩集を、大好きな歌人である光森裕樹氏と同じ「港の人」から出版し、思いがけず人とのつながりが生まれ、原稿依頼も頂くようになり、本当に周囲の方々に恵まれて、一生懸命全力で走るように書いてきた。

私は理系出身であるが、人生において文学を捨て切れなかった。しかし一方で、自然科学にもまた強く惹かれている。数理哲学や環境文学という分野があるが、私は、数理文学というもの（そんなものがあるのかどうかはよくわからないが）に挑戦してみたいと考えている。

数学や物理学などで使われるギリシャ文字には、独特の魅力がある。文理の境界を越える、そんな作品や詩人が

今後、現れて来てくれないだろうか。私が無知なだけで、そういった作品を書かれる方は、現在でも沢山おられるかもしれない。何年かかるかは果たしてわからないけれども、数理文学や理系文学が、文学の重要な分野となれば、実に嬉しいことである。

また、10年後に期待することとして、日本での詩歌の地位の向上がある。欧米では詩歌の地位は比較的高いようだが、日本では、まだその地位は発展途上にあるのではないだろうか。詩歌は小説などに比べて、本屋でもごく小さなスペースが隅っこにある状態である。（関西圏だけだろうか。私は大阪在住である）至極単純な例で恐縮であるが、将来的には、詩人が日本のノーベル賞候補者になる位の、詩歌分野の発展を見たいと考えている。

また、10年後までには是非、電子書籍を文学賞の対象にしてほしい。紙の本で出版しようとする、若い人、特に学生となると、資金面等の問題で、出版は数居が高いのではないだろうか。電子書籍であれば、紙の本よりは出版費用が安くつくので、優れた若い詩人に門戸を開くことになるのではないかと考える。また、ホームページやブログを対象とした賞も出て来てほしい。（他分野で優れたホームページに与えられる賞は既に存在する）

フラットな WEB の世界が評価の対象になれば、詩歌に多様性が生まれ、レベルの向上に貢献し、また詩歌人口も、或いは増えるのではないかと期待している。

最後に、文学の役割について言及したい。私は、文学が人間を救うということをも、身をもって経験して来たとし、そのことを信じている。ひとりの人間が、人間として生死の境に立たされたとき、文学は驚くほどの力を発揮する。高橋源一郎氏が書いたとおり、「文学は実学である」のである。また、詩歌文学そのものに時間を越え

る力があることは、詩歌を書き、また読んでいる皆様から、常々実感されているところであろう。100年以上の時を越えて、シェイクスピアやダンテ、シュペルヴィエルやニーチェは生きている。さらに古くは、ギリシャ叙事詩や万葉集などもまた、悠久の時を越えて、我々に人間や自然の美しさと力強さを教えてくれる。現代世界において、その歴史を背負い引き継ぎ、文章を書く我々もまた、未来の世代の為に、また過去の偉人達の為に、各個人において発せられる言葉を通して、時間を越えてゆくことを目指しているのではないだろうか。